

顕在的・潜在的シャイネスの不一致に関する検討¹

—孤独感，攻撃性，主観的幸福感を指標として—

稲垣 勉^{1,2} 澤海 崇文^{1,3} 相川 充^{1,4}

¹教育テスト研究センター ²鹿児島大学 ³流通経済大学 ⁴筑波大学

本研究では，自己報告によって測定される顕在的シャイネスと，自己報告によらない間接的な方法で測定する潜在的シャイネスの不一致がもたらす影響について，孤独感，攻撃性，主観的幸福感を取り上げて検討した。41名の男女を対象にした調査の結果，顕在的・潜在的シャイネスに不一致がある場合に，攻撃性の下位尺度である言語的攻撃が低い傾向がみられた。この点は顕在的・潜在的シャイネスの不一致によってネガティブ感情が生起したことに起因するという解釈が考えられるが，更なる検討が必要である。

キーワード：シャイネス，不一致，孤独感，攻撃性，主観的幸福感

1. 問題と目的

潜在的な特性や態度を測定する潜在連合テスト (Implicit Association Test; Greenwald, McGhee, & Schwartz, 1998; 以下 IAT) は，従来の顕在的測定と比して信頼性や安定性に優れ，個人差の測定に適している (潮村, 2016)。信頼性・安定性の高い IAT が作成されたことに伴い，顕在的・潜在的な特性や態度の不一致を扱う研究も増加している。これらの研究には，自尊心 (e.g., Jordan, Spencer, Zanna, Hoshino-Browne, & Correll, 2003) やシャイネス (e.g., Briñol, Petty, & Wheeler, 2006) などが挙げられる。特に顕在的・潜在的自尊心の不一致を扱った先行研究が多いが (e.g., 原島・小口, 2007; Jordan et al., 2003)，これらの研究では，顕在的自尊心が高く潜在的自尊心が低い場合，両者が高い場合と比して自己愛が高かったり，内集団ひいきを強く行ったりするといった結果が報告されている。すなわち，人の特性や態度を理解し，行動を予測する場合，これまで測定されてきた顕在的側面に加えて潜在的側面も測定し，両者の不一致の程度も考慮することの有用性が示された。

澤海・藤井・相川 (2012) は，質問紙を用いて測定する顕在的シャイネス (Explicit Shyness: 以下 ES) と，潜在的測定を用いて測定する潜在的シャイネス (Implicit Shyness: 以下 IS) の不一致について，自己愛の3下位尺度を対象に検討した。その結果，自己主張性のみ ES と IS の交互作用が観察され，ES と IS が不一致である群は一致している群より自己主張性が低かったが，他の2下位尺度 (注目・賞賛欲求，優越感・有能感) では交互作用はみられなかった。澤海他 (2012) で検討されたのは自己愛のみであったことから，本研究ではシャイネスと一定の関連が予想される攻撃性，孤独感，主観的幸福感を取り上げ，ES と IS の不一致についてさらなる検討を加える。

2. 方法

2.1 参加者 19-32歳の男女41名 (男性16名，女性25名，平均年齢24.14歳，SD = 3.55)

¹ 本研究のデータセットは藤井・澤海・相川 (2015) と同一であるが，藤井他 (2015) では諸変数間の相関関係を検討しており，ES・ISの不一致に焦点を当てた本研究とは目的が異なる。したがって，結果においては両者の不一致 (i.e., 交互作用) に絞って報告する。

が本研究に参加した。

2.2 材料 顕在的測度は Trait Shyness Scale (相川, 1991; 以下 TSS) 16 項目, 日本語版 Buss-Perry 攻撃性質問紙 (BAQ; 安藤他, 1999) 24 項目, 改訂 UCLA 孤独感尺度 (諸井, 1992) 20 項目, 主観的幸福感尺度 (Diener, 1984) 5 項目を使用し, 全て 5 件法 (1: あてはまらない—5: あてはまる) で回答を求めた。潜在的測度は相川・藤井 (2011) のシャイネス IAT を使用した。上記の他にいくつかの心理尺度や課題を実施しているが, 本報告の内容とは関連しないため割愛する。

2.3 手続き 本研究は全て PC を用いて実施した。まず, 参加者に対し顕在的測度とシャイネス IAT を実施した。顕在的測度とシャイネス IAT の実施順序は参加者ごとにカウンターバランスをとった。調査が終了した後, 参加者に再度連絡を取り, 謝礼 (図書カード 500 円分) を渡した。

3. 結果

3.1 各尺度の得点化 顕在的測度は逆転項目を逆転した上で, 合算平均得点を算出した。IAT は *D* 得点 (Greenwald, Nosek, & Banaji, 2003) を算出した。いずれの尺度も得点が高いほど, その尺度名の傾向が高いことを示す。

3.2 ES と IS の不一致の検討 TSS 得点 ($\alpha=.92$) と IAT 得点の中央値 (順に 3.19, -0.18) を基準に, 参加者を ES・IS の低群・高群にそれぞれ分割した。その後, ES (高・低) および IS (高・低) を独立変数, 孤独感 ($\alpha=.85$), 攻撃性 (身体的攻撃, 短気, 敵意, 言語的攻撃 (順に $\alpha=.83, .76, .72, .70$), 主観的幸福感 ($\alpha=.80$) を従属変数とした分散分析を行った。以下, ES と IS の不一致が見られた箇所, すなわち交互作用が有意だった結果のみ報告する。

ES と IS の交互作用が有意だったのは, 攻撃性の下位尺度の一つである「言語的攻撃」のみであった ($F(1, 33) = 13.20, p = .001, \eta_p^2 = .29$)。単純主効果検定の結果, ES 低群において, 言語的攻撃は IS 高群 ($M=2.64$) より IS 低群 ($M=3.56$) の方が 1%水準で有意に高かった。また IS 低群において, 言語的攻撃は ES 高群 ($M=2.40$) より ES 低群 ($M=3.56$) の方が 1%水準で有意に高かった。ES 高群における IS 低群 ($M=2.40$) と IS 高群 ($M=2.86$) の差は有意には至らなかった ($p = .10$)。結果を図 1 に示す。

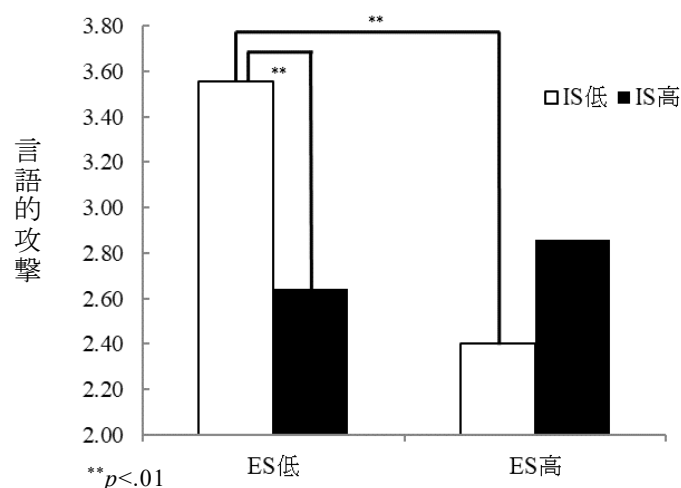


図 1 言語的攻撃に対する ES および IS の影響

4. 考察

攻撃性の下位尺度である言語的攻撃においてのみ, ES と IS の交互作用が見られた。ES 低群において, IS 高群より低群の方が言語的攻撃が高かったことは, ES と IS が一致して

いない場合に言語的攻撃が低かったといえる。一方、有意には至っていないが、ES高群において、IS低群よりもIS高群の言語的攻撃が高く、ESとISの両者に不一致を示す群の言語的攻撃が低い傾向がみられている。このように、ESとISを併せて測定することで、特に言語的攻撃の高い（あるいは低い）者を検出しやすくなると考えられる。

この交互作用はどのように解釈されるのであろうか。澤海他（2012）は、ES低群において、IS高群の方がIS低群より自己主張性が低いという結果を報告している。この解釈として、ESとISの不一致によって生じるネガティブ感情（Briñol et al., 2006）が自信の無さにつながり、自己主張性の低さに影響した可能性を述べている。澤海他（2012）の解釈を本研究の結果に適用すると、ESは低いISが高い者は、不一致によって生起するネガティブ感情によって自信の無さが生じ、言語的攻撃が低くなったと考えることができる。

ただし、ISは意識されにくいものであることを考えると、TSSやIATの得点のフィードバックなどがなくない状況では、そもそもESとISの不一致が意識化されることも生じにくい。また、攻撃性の他の下位尺度や、その他に測定した諸変数においても、こうした交互作用はみられなかった。したがって、この解釈が妥当であるか否かは、更なる検討が必要である。たとえば、今回のような量的な検討のみならず、ESとISに不一致を示す参加者に面接調査を行うといった質的なアプローチも検討の余地があると思われる。

5. 参考文献

- 相川 充（1991）特性シャイネス尺度の作成および信頼性と妥当性の検討に関する研究 心理学研究, 62:149-155
- 相川 充・藤井 勉（2011）潜在連合テスト（IAT）を用いた潜在的シャイネス測定の試み 心理学研究, 82:41-48
- 安藤 明人・曾我 祥子・山崎 勝之・島井 哲志・嶋田 洋徳・宇津木 成介・大芦 治・坂井 明子（1999）日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙（BAQ）の作成と妥当性、信頼性の検討 心理学研究, 70:384-392
- Briñol, P., Petty, R. E., & Wheeler, S. (2006) Discrepancies between explicit and implicit self-concepts: Consequences for information processing. *Journal of Personality and Social Psychology*, 91:154-170
- Diener, E. (1984) Subjective well-being. *Psychological Bulletin*, 95:542-575
- 藤井 勉・澤海 崇文・相川 充（2015）顕在的・潜在的シャイネスと心理的適応との関連——IATを用いて—— 感情心理学研究, 22:128-134
- Greenwald, A.G, McGhee, D. E., & Schwartz, J. L. K. (1998) Measuring individual differences in implicit cognition: the implicit association test. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74:1464-1480
- Greenwald, A. G., Nosek, B. A., & Banaji, M. R. (2003) Understanding and using the implicit association test: I. An improved scoring algorithm. *Journal of Personality and Social Psychology*, 85:197-216
- 原島 雅之・小口 孝司（2007）顕在的自尊感情と潜在的自尊感情が内集団ひいきに及ぼす効果 実験社会心理学研究, 47:69-77
- Jordan, C. H., Spencer, S. J., Zanna, M. P., Hoshino-Browne, E., & Correll, J. (2003) Secure and Defensive High Self-Esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, 85:969-978
- 諸井 克英（1992）改訂 UCLA 孤独感尺度の次元性の検討 人文論集（静岡大学）, 42:23-51
- 澤海 崇文・藤井 勉・相川 充（2012）顕在的シャイネスと潜在的シャイネスの不一致に関する検討 日本グループ・ダイナミックス学会第59回大会発表論文集, 192-193
- 潮村 公弘（2016）自分の中の隠された心——非意識的態度の社会心理学——サイエンス社

